

きらびやかな照明と洗練されたアロマが漂う、都心の一等地のセレクトショップ。三ヶ月間頑張った自分へのご褒美のつもりだったけれど、その圧倒的な高級感に私は気後れしていた。

（やっぱり、場違いだったかも……。店員さんもモデルみたいに綺麗だし、私なんかが来る場所じゃなかったかな……）

不安に駆られ、バッグを握りしめて店を出ようとしたその時、背後から声をかけられた。

「いらっしやいませ。……お客様、今日は何か『特別な一着』をお探しですか？」

鼓膜を甘く震わせる、低く落ち着いた声。振り返ると、そこには彫刻のように完璧な造形美を誇る男性が立っていた。涼やかな目元にはすべてを見透かすような鋭さと、蕩けるような甘い温度が同居している。スッと通った高い鼻筋に、知的な色香を漂わせる端正な唇。まさに、物語から抜け出したような

イケメンだ。

（わ、綺麗な人……。あ、この人、雑誌で特集されていたカリスマ店員の蒔斗さんだ……。！）

「あ、えっと……。自分へのご褒美に何かあればと思ったのですが、私には少し早かったかもしれません」
「ご褒美、ですか。それは素晴らしい理由ですね」

彼はふっと口角を上げ、絶妙な距離感で歩み寄ってきた。洗練されたサンダルウッドの香りが鼻腔をくすぐる。

「具体的に、どのようなアイテムをお探しでしょうか？」

「……ワンピースを、一枚新調したいなと思って」
「承知いたしました」

蒔斗さんは私をじっくりと眺めると、確信に満ちた足取りで一着のドレスを手にとった。

「お客様の柔らかな透明感には、あえて芯のあるこちらのデザインを。……いかがでしょう」

差し出されたのは、深いミッドナイトブルーのワンピース。シルクのような光沢が、店内の照明を反射して美しく揺れている。

「わあ……綺麗……っ」

思わず、感嘆の声が漏れた。落ち着いた色味なのに、どこか艶やかで、洗練された大人の色香が漂っている。

（……すごい。自分じゃ絶対に選ばないけれど、これ素敵……）

「計算されたシルエットと、この潔いバックスタイルが、お客様の魅力を引き立ててくれますよ」

彼に促されて背面を見ると、清楚なボートネックとは対照的に、腰の近くまでV字に大きく開いた大

胆なデザインだった。

「えっ！……これ、背中が丸見えじゃないですか。私には派手すぎます。着こなす自信なんて……」

「そんなことはありませんよ。お客様のような上品な美しさをお持ちの方こそ、こうしたデザインが映えるんです」

迷いのない確信に満ちた声。その涼やかな瞳に見つめられると、彼が言うことが絶対の正解であるかのように思えてくる。

「まずは、試着してみませんか？」

「そう、ですね……。じゃあ、試着してみます」

「ありがとうございます。試着室にご案内しますね」

蒔斗さんは満足げに微笑むと、淀みのない動作で私をエスコートし始めた。

彼の大きな手が、私の背中にそっと添えられる。薄いブラウス越しに伝わる体温に、私は吸い寄せら

れるように、厚いカーテンで仕切られた試着室へと足を踏み入れた。

「着替え終わったら、すぐに声をかけてくださいね」
「は、はい……」

厚手のカーテンが引かれ、私は鏡張りの密室に一人取り残された。売り場から少し離れた試着室の中には、店内のジャズのBGMが聞こえてくるけれど、私と蒔斗さん以外に誰もいないこの空間は静まり返っている。

「……あれ？」

着ていたブラウスのボタンを外し、意を決して、ハンガーに掛かったミッドナイトブルーのワンピースを試着した。

綺麗だ。ドレスそのものは、溜息が出るほど美しい。でも、サイズが合わなかった。

（……大きい。……っていうか、大きすぎるんだけど、これ……っ？）

鏡に映る私は、まるで大人の服を借りた子供のようだった。肩のラインは大きく外側に落ち、一番のポイントである背中のV字カットは、サイズが大きすぎるせいで生地が余り、だらしなく横に広がってしまっていた。

（でもよかったかも……。これなら、買わなくても済みそう。ドレスは素敵だけど、やっぱりちょっと派手すぎるもん……）

「あの……蒔斗さん。……すみません」

カーテンの向こう側に届くよう、震える声で呼びかける。

「……あの、サイズが……。すごく、大きくて……。うまく、着られなくて……っ」

「……おや。サイズが、合いませんでしたか？」

「は、はい……。肩のところが、すごく余っちゃって……。背中も、ぶかぶかで……。これじゃ、ちゃんと着こなせそうにないです」

私は、今にもずり落ちそうな肩紐を必死に手で押さえながら、言った。すると、沈黙の後に、カサリとカーテンが揺れる音がした。

「……失礼します。シルエットを確認させていただきますね」

「えっ！？ あ、待って……。っ！」

止める間もなかった。厚いカーテンがわずかに開き、蒔斗さんの長身が、狭い試着室の空間へと滑り込んでくる。一気に、彼の纏うサンダルウッドの香りと、高い体温がこの密室を支配した。

(……わ、入ってきた……。っ！ 下着は見えてない……。よね？ でも、背中が、こんなに開いているし……)

私は反射的に背中を丸め、胸元の生地をぎゅっと抱え込む。蒔斗さんは、そんな私の動揺を意に介さない様子で、じっと鏡越しに私を見つめた。

「……なるほど。生地が余っていますね。失礼しました」

「い、いえ……」

「今、正しいサイズのワンピースをお持ちします。その前に、正確なサイズを測らせていただいてもよろしいでしょうか？♡」

（え……？ サイズを、測る……？ 今、ここで……？）

蒔斗さんは、どこから取り出したのか、滑らかなメジャーを手に、私に一步近づいた。

「で、でも……っ」

「すぐに終わりますから。……さあ、少し腕を上げてください」

ひやり、と冷たいメジャーが、私の背中に回され、ブラのホックのすぐ下を、その滑らかな感触がなぞっていく。

「んっ……！」

「……まずは、アンダーからですね」

カチリ、とメジャーが固定される音。その時、蒔斗さんの指先が、わざとらしく私のおっぱいの膨らみの下を、すすっと撫で上げた。

「ひゃっ……！？♡」

「おっと、失礼しました。手が滑ってしまいました」

鏡越しに目が合う。蒔斗さんはうっすらと笑っていた。心臓が、ドクン、ドクンと警鐘を鳴らす。

「……次は、トップを測りますね」

メジャーがゆっくりと上に移動し、ブラの上から、

私のおっぱいの一番高い位置に当てられた。

「……このブラジャーは少し補正が強いタイプですね。これでは、お客様の本来のサイズがわかりません。ですので、少し外させていただきますね」

「えっ!？」

止める間もなく、蒔斗さんの指が、私のおっぱいの谷間に伸びてくる。そしてフロントホックタイプのブラは、彼の慣れた手つきによって、カチリ、と小さな音を立てていとも簡単に外されてしまった。

「あ……っ」

解放されたおっぱいが、重力に従って、ふわり、と揺れる。レースの薄い布一枚隔てていただけの肌に、試着室の空気がひんやりと触れて、乳首がきゅっと硬くなるのが自分でも分かった。

(……見られてる。裸の胸を、蒔斗さんに……っ。